

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06319	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	乳児音声発達の起源に迫る：アジアの言語から見た発達メカニズムの解明	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	馬塚 れい子 (理化学研究所・脳神経科学研究センター・チームリーダー)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、タイ語、韓国語、広東語、日本語というアジアの4言語を学ぶ乳児を対象として各言語の破裂音や単語レベルの韻律を獲得する過程を実験的に検証することを目的とするものである。

日本語と韓国語については、それぞれ順調に研究成果が得られていると判断する。しかし、タイ語に関する成果についてはまだ論文が一編も出ておらず、遅れが認められる。また、広東語に関しては、研究協力者の確保が困難となったことから、実験の継続を断念し、新たにパンジャブ語の調査に着手する変更を余儀なくされていることから、これら4言語間の比較も進展していない。

【令和3(2021)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	乳児期の音韻発達において、通説となっている知覚狭窄仮説と研究代表者らが提唱する聴覚バイアス仮説のいずれが支持されるかを、タイ語、韓国語、広東語、日本語を学ぶ乳児の音声弁別実験により検証するとの目的に対し、4言語各々について、破裂音や単語レベルの韻律に対する弁別実験を行い、いずれの言語においても知覚狭窄仮説を否定する結果を得て、聴覚バイアス仮説の優位性を実証した。研究成果を図書、論文、口頭発表、招待講演等で、国内外に向けて数多く発表し、特に海外への研究発信を行った点は評価できる。